

# 川まちづくりにおける 地域社会の協働過程に関する研究

岩田 圭佑<sup>1</sup>・田中 尚人<sup>2</sup>

<sup>1</sup>熊本大学政策創造研究教育センター 特任助教

<sup>2</sup>熊本大学政策創造研究教育センター 准教授

近年、市民参加のまちづくりや住民主体のまちづくりなど、地域社会が協働してまちづくりを進めていくことの重要性が問われている。また、川づくりをまちづくりの一環として行う「川まちづくり」の重要性も問われている。このことから、今後の川まちづくりにおいて地域社会が協働していくために、これまでの川まちづくりにおいて地域社会が歩んできた過程を見直し、今後の川まちづくりにおいて地域社会が協働を図る方法を見出す必要があるといえる。本研究では、地域社会の可視化手法を提案し、川まちづくりにおける地域社会の協働に必要な要件を考察することを目的とする。そのためにまず、広島を対象に、川まちづくりに関わる様々な地域社会の活動の過程を整理する。次に、それらの活動について、グループ・ダイナミックス理論を用いて、活動の過程を可視化する。そのうえで、NPO法人・雁木組の協働過程を分析し、地域社会の協働に必要な要件を考察する。

## 1. はじめに

### (1) 研究の背景と目的

水辺におけるまちづくりのプロセスについては、まちづくりの中で川づくりをどのように位置づけるかを論じた樋口らの研究<sup>1)</sup>や、行政と住民による事業計画策定から管理運営における協働関係に着目し、都市河川整備を契機として進んだまちづくりの展開を明らかにした出口らの研究<sup>2)</sup>などがあげられる。これらの研究は、特定の河川整備事業を視点にまちづくりの在り方や協働のあり方を論じている。

一方で、日本各地の水辺において様々なまちづくり活動が見られるようになって久しく、それらの長期的な評価も可能になってきているが、河川整備などの事業に偏っていない、川まちづくりに関わる地域社会全体の動態についてはこれまで研究対象にされてこなかった。このように地域社会全体にとっての水辺の重要性を明確に示すことは、今後の川まちづくりにおいて有益な資料となり得る。このことから、川まちづくりに関わる地域社会全体の動態を可視化することによって、川まちづくりのプロセスを整理し、地域社会全体の変化や協働に関して分析することが出来ると考える。そこで本研究では、地域社会の可視化手法を提案し、川まちづくりにおける地域社会の協働に必要な要件を考察することを目的とする。

### (2) 研究の手法

研究対象地は、太田川のデルタ地帯に位置する広島県広島市とする。まず2章において、近年の川まちづくりにおける地域社会の活動を過去の新聞記事に求め、データベ

ス化しその変遷を整理する。次に3章では、活動の変遷をグループ・ダイナミックス（以下G・D）という理論に基づいて可視化する手法を提案する。4章ではをG・Dを用いて地域社会の動態と活動の構造の変化を分析し、地域社会全体にとっての水辺の役割を明らかにする。5章では、NPO法人・雁木組の活動を分析し、川まちづくりにおける地域社会の協働に必要な要件を考察する。

## 2. 近年の川まちづくりにおける地域社会の活動の変遷

### (1) 本研究における地域社会の定義

本研究では、地域社会を「川まちづくりをフィールドとして活動する組織が形成する仕組みや関係性の総体」と定義した。さらに、川まちづくりをフィールドとして活動する主体の組織を以下の3つに分けて定義した。

- 1) 市民：地域住民が地域内へ向けた活動を行うために自発的に発足させた、まちづくり活動を行う組織。
- 2) 行政：国の機関や、県、市町村などの地方公共団体に属する組織。
- 3) アソシエーション：NPOや民間企業等の組織が集まり、地域内に向けた活動に限らず、地域外へ向けた活動も含み、川まちづくりをフィールドとした活動を行う組織。なお、民間企業の場合は、1つの企業はアソシエーションではなく、複数の企業の集まりをアソシエーションとする。

### (2) 広島市の川まちづくりにおける地域社会の活動の変遷

広島は瀬戸内海に面し、太田川の下流部が太田川放水路、天満川、本川、京橋川、元安川、猿猴川の6本の川に分かれたデルタ地帯に位置する都市である。市街地に占める水面積の比率が13%もあり、瀬戸内海の干満によって水位が変化する感潮河川であることが特徴である。水辺には、雁木などの歴史的遺構、連続した河岸緑地があり、観光施設や文化施設が立地している（図-1）。太田川は、古くから川舟による輸送路として

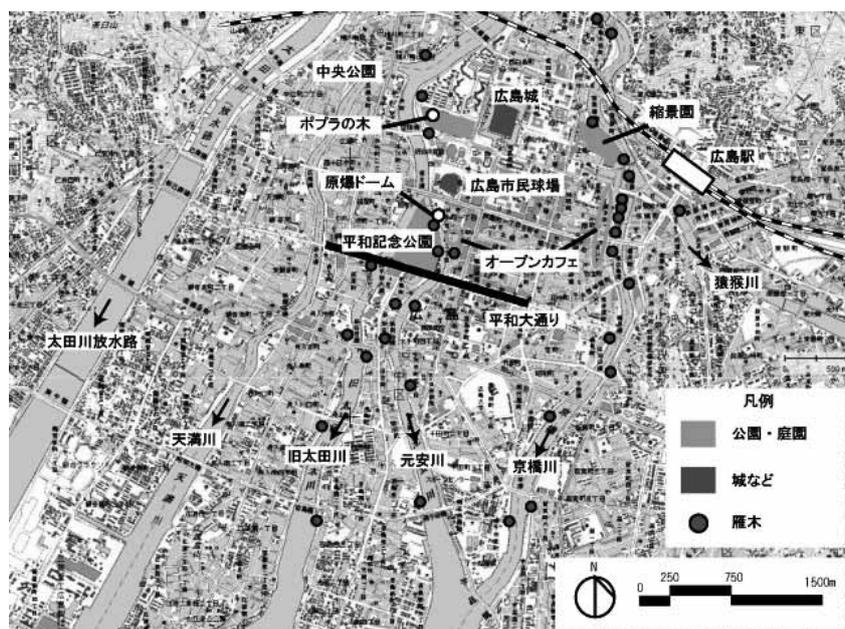


図-1 広島市平面図（国土地理院1/25000地形図に筆者加筆）

表-1 広島地域の社会活動のデータベース（新聞記事を基に筆者作成）

番号	活動	主体名	主体以外の集合体	発足日	目的(対象・結果)
1	広島夏祭り太田川花火大会	広島市観光協会	市民観光客40万人	1965	観光客一花火を楽しんでもらう
2	風揚げ大会	広島市消防団	市民2000人、広島ニューライオンズクラブ	1971	市民一今年一年の火の用心を願う
3	第23回広島市民レガッタ	広島県ボート協会	全国52チーム400人	1977	市民一太田川の活用
4	広島市民レガッタ2年ぶりの開催	広島県ボート協会	参加者約200人	1977	市民一太田川の活用
5	散乱ごみ追放キャンペーン	ほれいなひろしま・まちづくり市民会議	市民4300人	1981	広島市中心部一ゴミをなくす
6	クリーン太田川	クリーン太田川実行委員会	ボランティア団体、地元企業132団体2万人	1988	太田川水系11市町村一太田川の水質を守る
7	太田川でミニ学会	中国地方建設局太田川河川工事事務所	学識経験者カマラン、市民200人	1989	市民一太田川の環境について知ってもらう
8	イカダくんだりカワニバル	広島文化デザイン会議実行委員会	市民	1989	市民一太田川の自然と触れ合う
9	定期遊覧船	広島リバークルーズ	広島市	1989	観光客、市民一水上バスの運行で観光の活性化
10	太田川に魚道設置	中国地方建設局	広島県	1994	太田川一魚が上る環境を作る
11	太田川の自然と水を考える集い	漁業組合	市民	1994	市民一河川流域の自然破壊や生活を支える水の現状を話し合う
12	いのぼり	建設省太田川河川工事事務所	幼稚園160人	1994	市民一放水路の大切さを知ってもらう
13	ゲンジボタルの幼虫放流	せせらぎの会	中国地建太田川河川工事事務所	1995	古川せせらぎ河川公園一ホタルのいる美しい川にする
14	防災訓練	広島市	陸上自衛隊第十三師団、島根県、賀茂広域行政総合消防局	1995	市民一阪神大震災の教訓を活かす
15	イマザクワの苗木植樹	広島市かき養殖連絡協議会	会員	1996	漁業一かき養殖を守る
16	元安川薪テラス整備	建設省中国地方建設局太田川河川工事事務所	広島市、商店街振興組合連合会	1996	市民一水辺に近づけるように
17	イスキの稚魚放流	市水産振興協会	?	1997	漁業一栽培技術の開発
18	太田川河川こどもモニターサミット	中国地方建設局太田川河川工事事務所	小中学生・父母約140人	1997	子供達一太田川の環境を考える
19	防災訓練	消防	警察、自衛隊、企業、市民など2300人	1998	市民一大地震や大型台風時の避難訓練
20	ワラワフェスティバル	同実行委員会	市民	1998	市民一平和の大切さを知ってもらう
21	河原の清掃活動	広島市漁業協同組合青年部	市職員	1999	太田川一環境保全
22	第2回川での福祉と教育の全国交流会INPO	障害者約300人	読売新聞広島局員などが後援	2000	参加者一人一人の川への思いについて考える
23	太田川の水辺サロ	実行委員会主催	住民団体、市民	2000	市民一川を通じて交流を深める
24	地球に優しいひろしま2001	実行委員会主催	?	2001	太田川一水源保全のための募金、太田川源流への植林
25	川の情報「Go!Gorillu」オープン	国土交通省太田川河川工事事務所	?	2001	行政一地域に開かれた行政
26	みずウォーク2001広島大会	広島TV、読売新聞大阪、日本ウォーキング協会参加者	?	2001	参加者一水辺に親む健康ウォーク
27	吉野川から太田川の明日を考えよう	INPO法人環・太田川	市民	2001	市民一太田川を良くするための住民のアプローチの場の提供
28	水辺の創作会議	国土交通省太田川河川工事事務所、県、市	市民	2001	市民のアイデア一広島の川まちづくりに活かす
29	水辺の創作フォーラム	国土交通省太田川河川工事事務所	市民団体メンバー120人	2002	太田川周辺一川や水辺を活かしてまちを活性化する方法を話し合う
30	市民レガッタアンケート	広島県ボート協会	参加者	2002	参加者一広島レガッタの存続のための打開案を募る
31	太田川子供モニターのつどい	国土交通省太田川河川事務所	小中学生約20人と家族ら	2002	市民一周辺の自然を1年間観察し疑問や意見を報告してもらう
32	ポプラ付近の川沿いの通りの命名運動	市民グループ「セアック」	セアック「まちの人をつなぐ」ひろしま川通り活用委員会	2003	ポプラ付近の通り一素敵な場所を多くの人に知ってもらう
33	イン舟作り教室	太田川に草舟を浮かべる会	家族連れ参加者約60人	2003	市民一川の環境を考えるきっかけづくり
34	「水と環境」をテーマにしたフォーラム	INPOひろしま生涯教育研究所	市民、環境カウンセラー、まちづくり担当職員	2003	広島市一水の都としての魅力を見直す
35	水辺の暮らしまデラティブ	広島市などで行く実行委員会	市民	2003	広島市全体一水辺の都構想の実現
36	広島市の花火大会統合	広島祭委員会	?	2003	花火大会一花火大会の存続
37	いっ子ふれあいの水辺整備	国土交通省太田川河川事務所	エコロジー研究会ひろしま	2004	太田川放水路河川敷一子供達が水遊びや自然観察ができる
38	ポプラの保存運動	市民グループ「セアック」	?	2004	ポプラ一再生、保存
39	ポプラの立て直し	国土交通省太田川河川事務所	国土交通省太田川河川事務所、セアック、建設業者	2004	ポプラ一再生、保存
40	水辺デザインウォーク	セアック	専門家、市民約50人	2004	ポプラの再生活動一活動を盛り上げる
41	いっ子ふれあいの水辺フェスティバル	エコロジー研究会ひろしま	広島市交流課、小学生80人	2004	地域住民一川の場として活用
42	ふれあいの水辺学習塾	エコロジー研究会ひろしま	地元の小学生80人	2004	地域住民一川や水に親んでもらう
43	シジミ放流	広島市水産課	漁協	2004	広島市民一潮干狩りを楽しんでもらう、太田川一水質浄化
44	雁木タクシーの運行	雁木組	市民ボランティア	2004	市民、観光客一広島の水辺の良さを考える
45	京橋川右岸オープンカフェ開店	水の都ひろしま推進協議会	市民、カフェ	2005	京橋川の河岸の商業利用一水辺に人々が集まるための仕掛け
46	稚木の放流	企画：広島市、太田川漁協	小学生と保護者44人	2005	子供達一川にすむ生き物と触れ合ってもらい
47	みる・まぐ・ふれる2005国土建設フェア	国土交通省中国地方整備局	学生、家族、出展：広島大学、企業127団体	2005	市民一防災学習
48	太田川再生プロジェクト	広島市	学識経験者、漁協NPO代表など16名	2006	太田川一1960年代の美しい姿に再生しまちづくりに役立てる
49	川まつり	川まつり実行委員会	?	2006	猿猴川周辺一賑わいを取り戻す
50	太田川ふるさとフォーラム	INPOひろしま生涯教育研究所	学識経験者、林業関係者	2006	市民一太田川との共生を考える
51	太田川水辺学習	国土交通省中国地方整備局	警察、消防、流域市町、自衛隊、地域住民31機関約1500人	2006	流域住民など一梅雨や台風などによる洪水に備えた防災訓練
52	川の歌集	水の都ひろしま推進協議会	?	2006	観光一小学校の教育、川のコンサートを歌う
53	野外映画鑑賞会	IPPC	市民、若者一平和学習	2007	市民一若者一平和学習
54	浸水ハザードマップの作成	広島市	?	2007	市民一いち早い非難を促す
55	太田川せせらぎ学習塾	エコロジー研究会ひろしま	?	2007	市民一太田川の自然に触れ水や生き物に親んでもらう
56	シジミ稚魚放流	広島市水産課	漁協、雁木組	2007	市民一シジミを育てて太田川に親んでもらう
57	太田川再生プロジェクト報告書提出	太田川再生プロジェクト検討委員会	広島市	2008	太田川一1960年代の美しい姿に再生しまちづくりに役立てる
58	市民フォーラム「アユの遡上取り戻そう」	INPO法人環・太田川	学識経験者、広島市長、国土交通省太田川河川工事事務所	2008	市民一アユが遡上する川を取り戻す取り組みを話し合う
59	川遊び注意看板作り	小学校児童	某町地区安全推進連絡協議会、太田川河川工事事務所	2008	市民一二度と同じ事故が起きないように
60	バーサイドイベントプロジェクト	広島市立大芸術学部学生	OB、若手アーティスト	2008	市民一開かれた芸術
61	太田川の堤防、護岸の安全点検	国土交通省太田川河川事務所	?	2008	市民の生活一洪水から守る
62	市民フォーラム「川ガキ、海っこ育てたい」	INPO法人環・太田川	市民70人	2009	大人一子供に自然を語り解く力を与える
63	川に学ぶ体験活動全国大会inひろしま	太田川河川事務所	広島県、広島市参加者	2009	参加者、市民一河川に親んでもらう
64	アユ稚魚放流	太田川漁協	?	2009	市民一解禁日に多くのの人に楽しんでもらう
65	子供見守りカメラの設置	警察庁	!	2010	子供一犯罪から守る

※表中の色 地域社会：市民一赤 アソシエーション一黄色 行政一青

利用され、上流からは木炭、鉄、紙などが運ばれ、材木は筏によって運搬されていた。現在は、主に観光を目的とした舟運に利用され、民間企業やNPO法人などが中心となって広島の水辺を周遊できる社会基盤が発達している。

広島地域の社会活動の内容を具体的に示すために、地域社会の活動の変遷についてデータベース（以下、DB）を作成した（表-1）。

DB化の際用いた資料は過去の新聞記事等である。新聞記事は、朝日新聞記事DB（KIKUZO-2 Visual for Libraries）と読売新聞記事DB（ヨミダス歴史館）を用いた。活動を調査する際は、各地の川まちづくりに関する活動について例えば、「掘割、活動」や「太田川、活動」などを検索キーワードとして検索した。その結果、KIKUZO-2では1170件、ヨミダス歴史館では352件ヒットした。これらの記事から、川まちづくりに関わる65個の活動を抽出した。さらに新聞記事を読み込み、その活動の「中心となる地域社会」や「活動に参加した地域社会」、その活動は何を対象にどのような結果を見出すのかといった「活動の目的」を分析した。

### 3. 川まちづくりにおける地域社会の活動の可視化

#### (1) 活動を可視化する手法

##### a) グループ・ダイナミクス理論

本研究で扱うG・Dの概念は社会科学の理論であり、集団の基本的な性質・集団と個人・集団と集団、さらにはもっと大きな組織と集団の関係についての法則を実証的な方法によって明らかにしようとするものである。G・Dにおける「グループ」とは、「これ以上切り刻んだらなくなってしまう何らかの全体的性質（集合性）を持つ人々とその環境の総体（集合体）」と定義される。要するに集合体は、DBにおける「活動に参加した地域社会」に当てはまる。集合体は基本的に動き、変化していく存在である。G・Dはその集合体の動態を研究する分野である。一方、集合性の動態を「集合流」と呼ぶ。言い換えれば、一群の人々とその環境があいまって動いていく、その動き（流れ）が集合流である<sup>3)</sup> (図-2)

##### b) 活動の基礎構造

本章では、先述したG・Dの活動理論を活用して地域社会の活動の可視化を行う。本研究では、特に人間固有の活動の中の「主体」、「集合体」、「対象→結果」を活動の基礎構造と定義する。留意点としては、本研究において、「対象→結果」の項が、「活動の目的」として捉えていることである。なぜなら、「対象→結果」の項は、対象に対して求める結果を表しているのだから、これは、活動の目的になるといえるからである。(図-3)

#### (2) 各対象地の地域社会の活動の可視化

##### a) 縦軸と横軸の設定

地域社会の活動の変遷を可視化するために必要となる軸は、まず「時間軸」である。次に必要な軸は横軸であるが、横軸を決定するにあたって、まず、表-1のDBの項目の「活動の対象」に関して分析した。その結果、本研究における活動の「目的」の「活動の対象」にあたる部分は、3つに分類することができた。具体的には、活動の対象が川づくりや水辺づくりなどの「社会基盤」に関する活動の場合、市民や参加者などの「地域内」に向けての活動である場合、観光客などの「地域外」へ向けての活動である場合の3つである。



図-2 グループと集合流

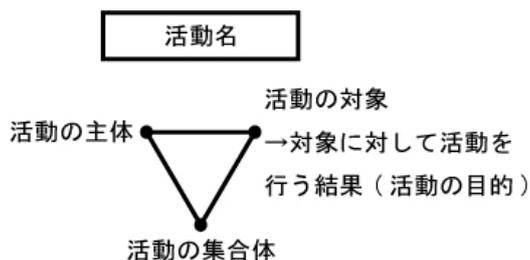


図-3 活動の基礎構造

これらの関係は、「社会基盤」が「地域内」や「地域外」に向けた活動の舞台、すなわち川まちづくりの舞台となるといえる。よって、「社会基盤」を中心に「地域内」、「地域外」へ向けた活動が行われる場合がある。反対に、「地域内」、「地域内」へ向けた活動の舞台となる「社会基盤」に関する活動が行われる場合もあるといえる。横軸は左側を「地域内」に向けての活動、右側を「地域外」に向けての活動とし、両者の中間にある活動を「社会基盤」に関するものとした。

#### b) 活動の可視化

地域社会の活動の可視化は、まず、1つの活動について、「発足年」、「活動名」、活動の「継続」、「中止」、「再開」などを明記した。特に、活動の「継続」については、「毎日、もしくは毎週」継続して行われているか、「毎年」継続して行われているかを明記した。また、各活動の主体については、G・Dの三角形の色を市民が主体の場合は「赤」、アソシエーションが主体の場合は「黄」、行政が主体の場合は「青」系統の色で明記した。(図-4、図-5) このように、地域社会の活動の変遷を可視化する上で、上記のような条件を設定することで、地域社会の活動の「集合流」が分析できると考えられる。以下、上記のような条件を満たすように、広島川まちづくりにおける地域社会の活動を可視化した。

## 4. 地域社会の協働過程に関する考察

### (1) 広島川まちづくりの地域社会の集合流の変化

図-4、図-5より、広島川まちづくりの地域社会の活動の集合流を分析した。まず、1990年（平成2）以前の地域社会の「集合流」は、「地域内」、「地域外」へ向けた活動が中心である。具体的には、「地域内」へ向けた活動は、「イカダ下りカワニバル」や「広島市民レガッタ」、「地域外」へ向けた活動は、市民や観光客を楽しませるための「太田川花火大会」などのイベント性の強い活動がある。また、「地域外」へ向けた活動は、「定期遊覧船」のような、川を使った観光舟運が継続的に行われていることも1990年以前の地域社会の集合流の1つとして特徴的である。これらの特徴として、現在まで続いているような継続的な活動が多いといえる。

次に、1990年から2000年間の地域社会の集合流は、「地域内」へ向けた活動、「社会基盤」に関する活動に変化していることが分かる。「地域内」へ向けた活動は、「水生生物の放流」や太田川に「こいのぼりを掲げる」などして、水環境を市民に考えてもらうための啓発活動などがある。また、「太田川子供モニターサミット」や「太田川の自然と水を考える集い」などの市民から参加者を募って、環境を考えるコミュニティをつくる活動などもあげられる。次に、「社会基盤」に関する活動は、「元安川の橋詰整備」や「親水テラス整備」などの水辺環境の整備に関する活動と、それに伴い、水辺環境を活かすための「オープンカフェの社会実験」などがある。このように、水辺を活用するための活動が起こっていることも広島川まちづくりの大きな集合流の1つだといえる。最後に、2000年以降の地域社会の集合流は、「地域内」へ向けた活動、「社会基盤」に関する活動、「地域外へ向けた活動」の全てに広がっていることが分かる。まず、「地域内」へ向けた活動は、防災、環境に関するコミュニティづくり、環境啓発活動など多様である。次に、「社会基盤」に関する活動は、河川敷にあるシンボルである「ポプラの木を保存」

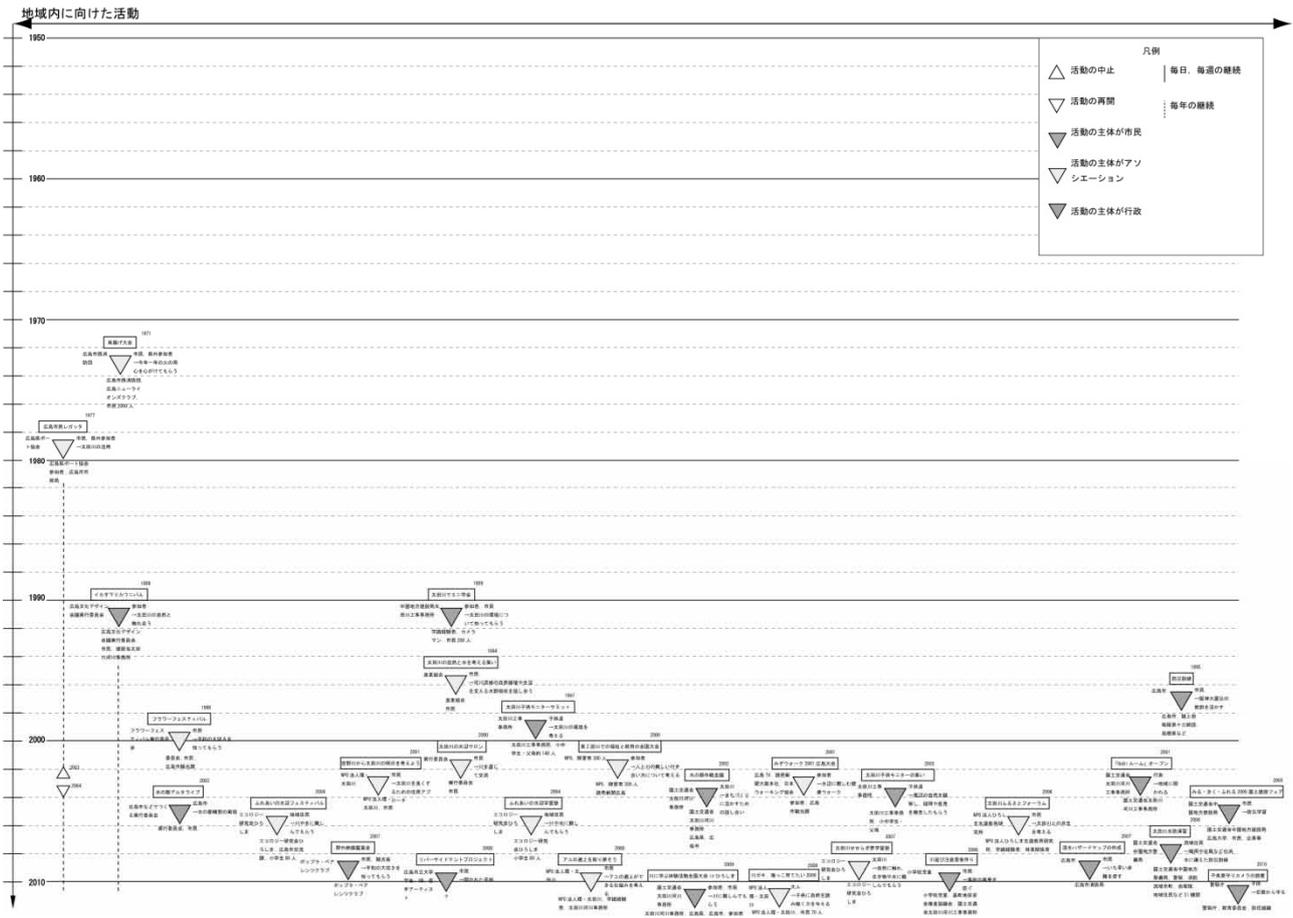


図-4 広島地域社会の可視化 (筆者作成)

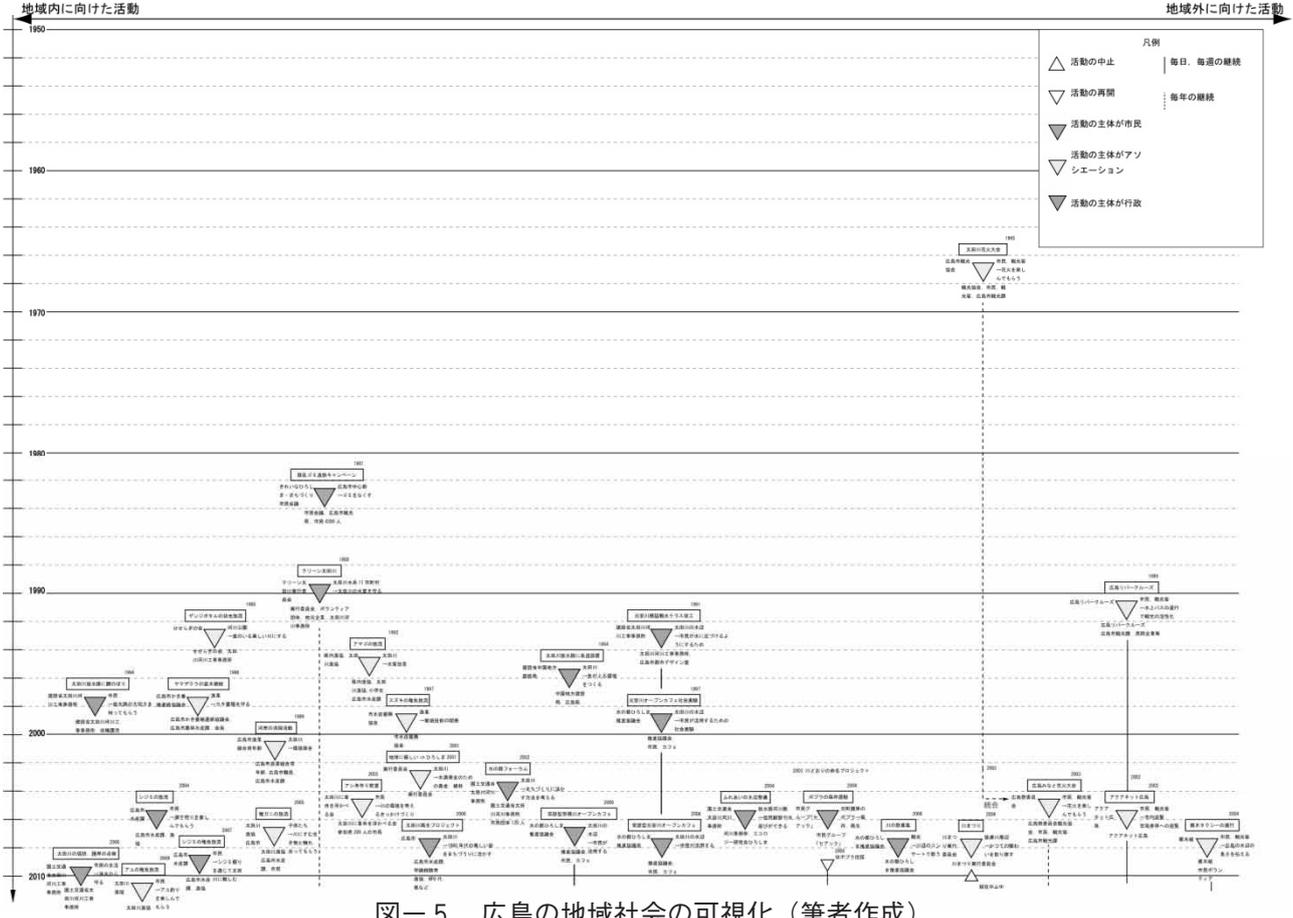


図-5 広島地域社会の可視化 (筆者作成)

する活動のように市民団体が中心となって行われる活動が特徴的である。最後に、「地域外」へ向けた活動は、2004年から「雁木タクシー」の運行を始めたNPO法人・雁木組の活動が特徴的である。2007年（平成19）に土木学会推奨土木遺産にも選定され、広島市の歴史的な遺産である雁木群を保存するための活動も起こっている。このように、広島市の地域社会の集合流は、2000年以降から現在にかけて活動の対象が広がっていることが大きな特徴であることが分かる。

## (2) 広島市の地域社会における主体と集合体の変化

広島市の地域社会の集合流の変化に基づく主体と集合体の変化について図-4、図-5を基に整理した（表-2）。まず、1990年以前の集合流は「地域内」へ向けた活動と「地域外」へ向けた活動が中心で、その中での活動の主体は、アソシエーションで、集合体に行政や市民が加わるという場合が多い。次に1990年代の集合流は、「地域内」へ向けた活動と「社会基盤」へ向けた活動へ流れ、活動の主体はそれぞれアソシエーション、行政が中心になっている。そして、活動の集合体の中にそれぞれ市民が加わるという場合が多くなっている。2000年代の集合流は、すべての集合流に流れている。

このように、広島市の地域社会は、特に「地域内」へ向けた活動の主体に市民が登場したことが特徴的である。また、活動の主体がアソシエーションや行政中心であった活動が近年、特に2000年以降は、全ての集合流が流れ、「地域内」へ向けた活動では市民、「社会基盤」に関する活動では行政、アソシエーション、「地域外」へ向けた活動ではアソシエーションが主体となって活動を行っている。1990年代から2000年代にかけての大きな変化は、「地域内」に向けた活動の主体に市民が登場し、「地域内」に向けた活動が活発に行われるようになったことである。このことから、近年の広島市の地域社会の集合流の変化期において市民とアソシエーションが重要な役割を担っていると考えられる。

表-2 広島市の地域社会における主体と集合体の変化

年代	集合流	主体の中心	集合体
1990以前	地域外	アソシエーション	アソシエーション, 市民, 行政
	地域内	アソシエーション	アソシエーション, 市民
1990	地域内	アソシエーション	アソシエーション, 市民, 行政
		行政	アソシエーション, 市民, 行政
	社会基盤	アソシエーション	市民, 行政
		行政	市民, 行政
2000	地域内	市民	市民, アソシエーション, 行政
		行政	アソシエーション, 行政
	社会基盤	アソシエーション	市民, アソシエーション
	地域外	アソシエーション	アソシエーション, 市民

## 5. NPO法人雁木組の設立過程に関する分析

### (1) NPO法人雁木組の概要

本章では、広島市のアソシエーションを主体とした活動団体の中から、NPO法人・雁木組（以下、雁木組）の活動に着目し、活動記録やヒアリングの内容を基に、1990年代から2000年代にかけて、雁木組の活動が始まった経緯を整理する。これにより、雁木組がどのように捉えられていたのかを整理する。

雁木組は、2004年（平成16）にNPO法人化し、水上タクシーの運行活動を始めた。その後、水上タクシーの活動を軸として、雁木組の歴史調査や保全活動環境に配慮したBDF燃料の使用、小学校と連携して環境学習活動を行うなどの他、内水面漁協や広島

市、jazzアーティスト、広島文化財団など様々な主体との協働での取り組みを行っている。太田川シジミのPR活動、ノーマイカーデーの協賛、灯籠流しの回収、水辺ジャズなどがその例である。そこで、雁木組を企画、設立した初期メンバーへのヒアリングを行い、雁木を活用した水上タクシーの企画が生まれた経緯について、「活動の主体」「活動の集合体」「活動の目的」ごとに整理する。

## (2) 水の都ひろしま構想策定における市民参画手法

「水の都ひろしま構想」は、1990年に策定された水の都整備構想を基礎とし、国土交通省、広島県、広島市が市民ワークショップなどを行いながら、市民と行政の協働により策定した。具体的には、市民意識を喚起し、社会実験等を通じて市民を巻き込みながら、市民の声を反映した構想を策定する、というプロセスとし、構想策定に関わるコンサルタントが、市民参画を担当した。ここでは、①ワークショップ、②社会実験、③当時の水上交通に関する状況について内容を整理して、雁木タクシーの取り組みの軸である「水上交通」の考え方について、経緯を明らかにする。

- ① ワークショップについて：ワークショップでは、「水の都というならば自分はこんな暮らしをしている」をテーマに数年先の絵日記を書いてもらうことで、活用のアイデアを広げるとともに、水の都の共通のイメージを持つ作業をした。この絵日記をもとに「100の原則」を市民でみつけだし、ワーキングチームでさらに20に集約をしたものを、「20の原則」として構想に盛り込んだ。このときに多くの参加者の賛同を得た絵日記は、『手を挙げて、水上バスを停めてみよう！』であった。
- ② 社会実験について：市民の「水の都」への想いを喚起し、声を構想に反映させるための社会実験の一つとして、WSのアイデアから水上バス実験「ボート・ウォーク」を企画した。2000年4月に4ヶ所（基町・横川・北大橋右岸・広島駅）に仮設の浮棧橋を設置して、漁船が参加して水上バスの日社会実験を実施した。社会実験では、市民が日常的に利用できる公共交通として水上バス運航を考えおり、遊覧、観光などを全く考えていなかった。当時は「雁木」を活かすという発想や、タクシーという発想もなかった。
- ③ 当時の水上交通に関する状況：当時はリバークルーズなど、遊覧を目的とした水上交通がある一方で、市民が日常的に利用できる公共交通としての水上交通はなかった。広島では、水上交通の実現については産、官、学、市民でたびたび議論されていた。しかし、満潮・干潮が課題となり、解決法を資金の必要なインフラ整備（浚渫、橋の架け替え、棧橋の設置）に求めていたため、実現に向けた動きにはつながらなかった。

以上から、水の都ひろしま構想策定における市民参画を通じて、水上交通という発想が生まれた一方、その実現のためには大きな整備が必要であり困難であるという考え方がされていたことが明らかとなった。

## (3) 構想策定後のNPO法人雁木組の設立までの取り組み

「水の都ひろしま」構想「推進計画」の推進組織として、2003年「水の都推進協議会」ができる。広島市が事務局となって、国、県、市、市民代表、学識、観光関係者などで

構成された。推進協議会では、推進計画に基づき、オープンカフェとコンサートを実施した一方、水上交通は、民が主導するもの、として位置づけられていた。

構想策定後、コンサルタントとしての業務は終了していたが、水辺に関わる多くの市民とのつながりは継続していた。水上交通に関しては、水上バス実験参加者の「水上タクシーをやりたい」という声を実現する方法を議論していく中で、「今あるものを利用して」という発想から雁木に着目するようになった。2004年3月、イベントで雁木を発着場として運航を初めて実施した。当初は運輸局から、雁木を発着場とすることに對し安全を不安視する声もあったので、社会実験として企画した面もある。

イベントでの運航が話題となり、運輸局の知人から、運航について法的な整備をして促進すべきという話があった。何度か運輸局に通ううちに、責任体制の問題と、動力船の運航主体の問題とで、法人化するように勧められ、NPO法人の設立を決意した。当初はお手伝いのつもりだったので、自分たちが運航主体になるとは思っていなかった。また、市民団体が運航する水上タクシーに対して、「遊び」に見られないような工夫が必要と考え、色やロゴ作成は専門家に協力を依頼した。2004年7月にNPOの申請、10月に認証を受け、本格的な運航をスタートさせた。またNPOには、ワークショップや社会実験で参加・協力のあった人へコンサルタントが声をかけてメンバーとなってもらった。船長は、一般募集で50人以上の希望者が集まったが、就職するつもりの人が多く、多くの人が早々にぬけていった。

#### (4) NPO法人雁木組の設立における協働過程の分析

以上から、NPO法人雁木組は、水の都ひろしま構想の策定をきっかけとして活動が始まったことがわかった。以下に、雁木を活用した水上タクシーの企画が生まれた経緯について、①活動の主体②活動の集合体③活動の目的ごとに整理する。

- ① 活動の主体：水の都ひろしま構想策定に関わるコンサルタントが、ワークショップや社会実験、運輸局との協議を進める中で、水上交通に対する考え方を絞り込んでいった。当初は手伝いのつもりだったので、自分たちが運航主体になるとは思っていなかったということから、構想策定時から積極的に主体となることを考えていたのではなく、ワークショップで出会った市民と共に社会実験や協議を進める中で、活動の主体を担うようになったと言える。
- ② 活動の集合体：ワークショップや社会実験を経て、協力関係を築いてきた人たちがメンバーとなっている。そのきっかけとしては、法人化にあたり船長やデザイナーが必要となることで、それまではイベントなどにおける一時的な関わりが多かったメンバーが、より具体的な協働関係へと発展する過程が読み取れた。
- ③ 活動の目的：雁木を活かそうという考え方は、水の都ひろしま構想の中にも具体的に述べられることはなく、水上交通を実現するための考え方を絞り込んでいく過程で、消去法的に見出されたものであることがわかった。

## 6. まとめ

本研究では、グループ・ダイナミックス理論を活用し、地域社会の活動を可視化することで、川まちづくりの変遷を明らかにした。また、広島においてはまた、具体的な活動と

してNPO法人雁木組の活動に着目し、活動の主体、集合体、目的ごとに整理した結果、水上交通の考え方や手法を絞り込んでいく過程で、活動の主体や集合体が必然的に形成されてくることが読み取れた。以上の分析から、広島では1990年から2000年代にかけて、川まちづくりの様々な考え方が議論されていく中で、具体的な活動へと結実していくような動きがある可能性を見出すことができる。今後の課題としては、水の都ひろしま構想策定にかかる他の関係者のヒアリングや、他の活動についての調査を進めて、広島における川まちづくりの流れについて明らかにすることができると思う。

謝辞：研究の調査にあたり、NPO法人雁木組の氏原氏、山崎氏、三原氏、(株)松波計画事務所の松波氏、広島市都市活性局観光交流部交流課の勢良氏、梶原氏、にヒアリングや資料の提供などの協力を頂いた。ここに記して謝意を表する。

### 【参考文献】

- 1) 樋口明彦・佐藤直之・高尾忠志：まちの活性化を促す都市河川整備のあり方に関する研究、土木計画学研究・論文集、Vol.22.No2、pp.387-396、2005
- 2) 出口良知・坂井文・越沢明：徳島市新町川における河岸公園整備を契機としたまちづくりの展開についての一考察、ランドスケープ研究、Vol.72(5)、pp701-705、2009
- 3) 杉万俊夫：コミュニティのグループ・ダイナミックス、京都大学学術出版、pp19-22、2006
- 4) CAQ：CAQHP、<http://www009.upp.so-net.ne.jp/caq/ppc.html>
- 5) 広島市市民局観光交流部交流課：ヒアリング、2010年12月16日
- 6) 国土交通省・広島県・広島市：水の都ひろしま推進計画pp10-11、2009
- 7) NPO法人雁木組：ヒアリング、2013年2月25日

## COLLABORATION PROCESS OF REGIONAL SOCIETY BASED ON COMMUNITY DEVELOPMENT AROUND WATERFRONT

Keisuke IWATA and Naoto TANAKA

The purpose of this study is to investigate the changes about the purpose and direction of social activities around waterfront using past article of newspaper and to examine the mechanism about community development shown by the formation of regional society applying the Group Dynamics method.